九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ラスール朝史料における東アフリカ

馬場, 多聞
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門

https://doi.org/10.15017/1804168

出版情報：史淵. 154, pp.95-122, 2017-03-17. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

ラスール朝史料における東アフリカ

馬　場　多　聞

1．はじめに

ラスール朝史（626/1229-858/1454）研究に用いられる「ラスール朝史料」には [Vallet 2010: 69-112]、往時のイエメンに関する記事ばかりではなく、対岸のエチオピアḤabashaや紅海・インド洋に面した地域の情報がわずかではあるが見られ、文字史料に乏しいこの時代の東アフリカの動向を知る上で第一級の史料的価値を有している。特に14世紀後半に東アフリカに関する情報がラスール朝史料中に急増すると言われるが [Vallet 2010: 407]、その最たるものとして、ラスール朝スルタン・アフダルal-Malik al-Afḍal（r. 764/1363-778/1377）によって777/1376年に編まれたアラビア語―ゲエズ語・アムハラ語辞書を挙げることができる [Afḍal: 217-9]。いわゆる『アフダル文書集*The Manuscript of al-Malik al-Afḍal*』に含まれているこの辞書は、近年、エチオピアの諸語やアラビア語イエメン方言の発展の見地より着目され、研究・校訂がなされている[1]。

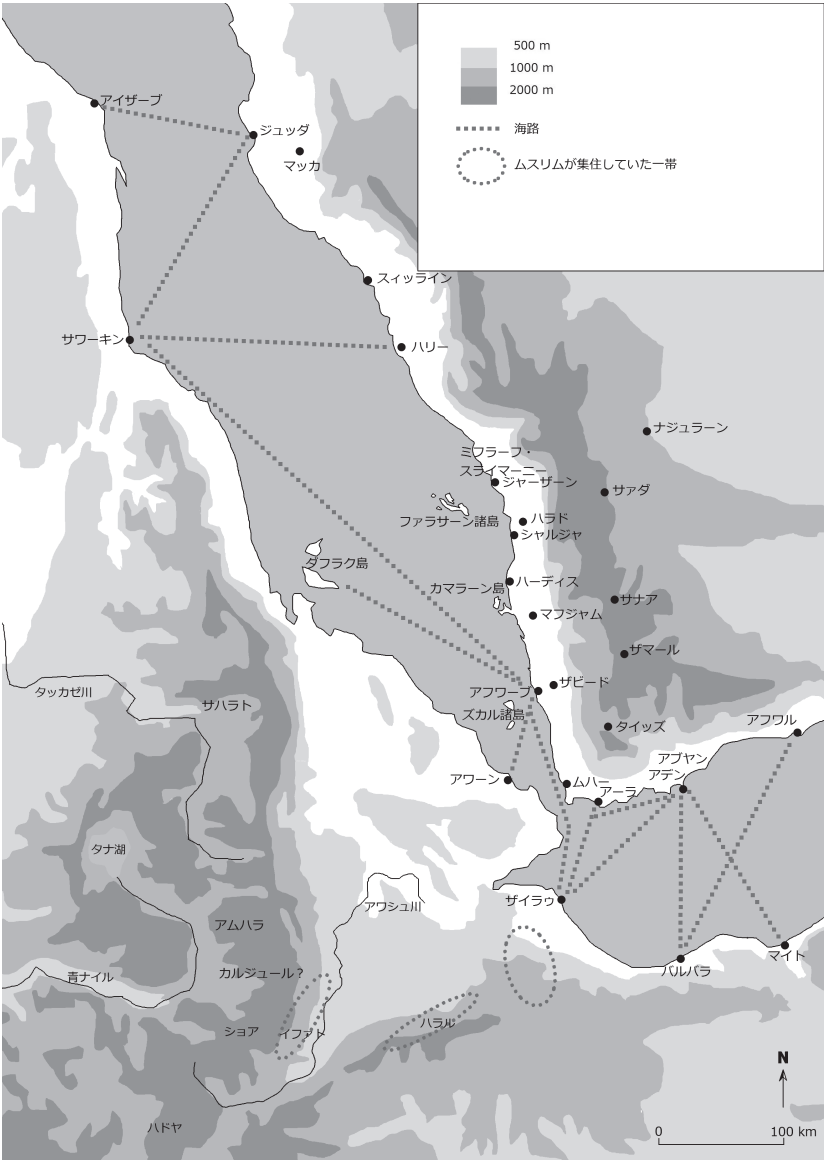
こうしたラスール朝史料にもとづいて、アフマドやフィーフィーはイエメンと東アフリカの外交史研究を行っている [Aḥmad 1980: 440-3; al-Fīfī 2005: 175-80]。彼らは特に10世紀以降のエチオピア周辺に成立したイスラーム系のティラーズ諸王国（Mamālik al-Ṭirāz）の統治者の実態やラスール朝との外交関係に着目したが、ラスール朝史料ではティラーズ諸王国のムスリム支配者は「エチオピアのスルタン」として総称される傾向にあり [Vallet 2010: 407-11]、ワラースマゥ家Walāsma‘以外の勢力については詳しいことはわからない[2]。一方でヴァレは、アフマドやフィーフィーの研究を踏まえた上で、エチオピアやザイラゥZayla‘における商取引やラスール朝下イエメンとの間で生じた交易の状

況を明らかにしている [Vallet 2010: 400-24; 557-61]。ラスール朝史料には、これらの政治や商業に関する記事以外にも東アフリカへ言及した記事が見られるが、未だ十分に検討されていない。

そこで本稿では、ラスール朝史料における東アフリカ関わる記事を収集・検討し、ラスール朝期からターヒル朝期（858/1454-923/1517）にかけてのイエメンと東アフリカにおいて人や物、情報が行き交っていたことを具体的に明らかにする。もっとも、本稿で見るようにラスール朝史料による東アフリカへの言及は限られており、また、地理的に近いエチオピアやザイラゥの記述が多い反面、紅海やインド洋に面した他の地域の情報はあまり見られない。こうした状況は、ラスール朝史料著者による世界認識の一端を表すとともに、海を媒介とした地域間交流のあり方を示しているものと考えられる。

※筆者作成。

地図1　アラビア半島と東アフリカ、インド洋



※Tamrat 1977: 141; Vallet 2010: 752; 石川 2009: 7 をもとに筆者作成。

地図2 イエメンとエチオピア、紅海沿岸

2．人をめぐって

2-1．イエメンから東アフリカへわたった人々

ラスール朝期イエメンを中心とする交易の様子を詳細に検討したヴァレは、イエメンから東アフリカへ至った商人が史料にはあまり見られないことを指摘している [Vallet 2010: 413-4]。その理由としては、イエメンは東アフリカの産物をもっぱら輸入する側であったため、イエメンから東アフリカへの輸出に携わる商人の数が相対的に少なかったことが考えられる。

商人以外の人々については、ラスール朝史料に若干の言及が見られる。たとえばイブン・ハーティムIbn Hātim（d. after 1302）は、以下の記事を残している。

> 636/1238-9年、我らが主シャヒードal-Shahīd（スルタン・マンスールal-Malik al-Manṣūr（r. 626/1229-647/1250））は、シフルal-Shiḥrの掌握を命じた。（その時）シフルは、イクバール家Banī Iqbālの手のうちにあった。（スルタン・マンスールは）ジャザリーal-Shihāb al-Jazarīの息子であるバルヤクBaryaqと呼ばれる者を（シフルの）ワーリー（wālī。総督）に任じ、イスバヒーal-Iṣbaḥīとして知られる者をナキーブ（naqīb。駐留軍隊長）とした。彼ら二人は、ある期間（シフルに）滞在した。すると前述のナキーブは、ワーリーを急襲して殺害し、彼のもとにあった収益を手にした。そして彼は、モガディシュMaqdishūへ逃れた。[Simṭ: 217-8]

これ以降、シフルはアデン‘Adanに次ぐ交易港として、ラスール朝の重要な収入源となった。たとえば、1293-6年頃のイエメンの収益状況を記録していると見られるラスール朝行政文書集によれば、アデンからのあがりが669,095ディーナール、シフルからのあがりが70,897ディーナールであり、シフルはアデンに次いで二番目に多くの税収を得られる港であった [Irtifāʿ: 112-22, 128-36; Vallet 2010; Jāzim 2013]。この記事では、ワーリーであるバルヤクの手元にあっ

たシフルからのあがりをイスバヒーが強奪し、そのままモガディシュへ高飛びしたことを伝えている。シフル・モガディシュ航路については、複数のラスール朝史料が言及するところである [Irtifāʿ: 128; Varisco 1994: 228]。シフルからインドへ向かう航路も知られていたが、イスバヒーはモガディシュを逃亡先とした。その理由としては、彼がモガディシュに何らかの縁を有していた可能性に加えて、航海時期が自然環境によって制限されていたことが挙げられる。船がイエメンからインド方面へ向かう際には4月から9月に卓越する南西季節風を、イエメンから東アフリカを南下する際には10月から5月に卓越する北東季節風を用いる必要があり、具体的な時期や風量についてはインド洋周縁部の地域ごとに時間差が見られた [栗山2014]。したがって出港時期は、こうした諸々の航海条件を加味して定められていたのである。このことを念頭に置けば、イスバヒーが事件を起こした時期はたまたまシフルからモガディシュへの出港時期であった、あるいは、イスバヒーがそうした出港時期を踏まえた上で急襲に至ったものと考えられる。

また、ラスール朝スルタン・マスウードal-Malik al-Masʿūd（r. 855/1451-858/1454）の亡命の事例も挙げられる [家島1993: 223-41]。ラスール家Banū Rasūl内部におけるスルタン位をめぐる内紛とターヒル家Banū Ṭāhirによる反乱によって、マスウードはアデンを脱出せざるを得なくなった。彼はそこからアーラʿĀra、そしてハクラḤaqraに至って後、ムハーal-Mukhāからザイラゥへ渡ったのである。ザイラゥやバルバラBarbaraには、ターヒル家に最後まで抵抗し、強制退去を命じられて移住した人々がいた。マスウードは彼らと合流し、ラスール朝再興の支援を求めて、キルワKilwaへ至ったと見られる。しかし然したる成果を得ることはできず、最終的にはインドのカンバーヤKanbāyaに滞在することとなった。ラスール朝とキルワの間には既に友好関係が築かれていたために、マスウードはキルワを亡命先としたと考えられている。

他方、ラスール朝スルタンによって東アフリカへ追放された者の記録を、イブン・ハーティムは残している。

（650/1252-3年頃）スルタン・ムザッファルal-Malik al-Muẓaffar（r. 647/1249-694/1250）は（タワーシーである）アルフィーal-Alfīへ、マムルークたちや御門の諸事（amr）を渡した。…そして彼から、返答として冗談（nukta）が出てきた。我らが主スルタンは、それに怒り、彼をエチオピアへ追放した。[Simṭ: 301]

タワーシー（al-ṭawāshī）・アルフィーは返答を誤ったがためにスルタンの怒りを買い、エチオピアへ流される憂き目にあった。ラスール朝下におけるタワーシーは高位の宦官を指し、主として東アフリカ出身者より成っていたと考えられるため [馬場2017]、追放というよりはむしろ、出身地へ送り返されたと見ることもできるかもしれない。いずれにせよアルフィーは、ラスール朝下にいれば享受できたであろう恩恵を余計な冗談によって失ってしまったのである。

一方で、新天地を求めて東アフリカへわたった事例を、ハズラジーal-Khazrajī（d. 812/1410）やスルタン・アフダルが記録に残している。

この年（652/1254-5年）、シャイフ（shaykh。長）にしてイマーム（imām。指導者）、ハナフィー派のファキーフ（faqīh。法学者）である、アブー・アッラビーゥAbū al-Rabī‘ Sulaymān b. Mūsā b. Sulaymān b. ‘Alī b. al-Jawn al-Ash‘arが亡くなった。…彼は、悪しき行為（al-munkar）を禁ずる者として知られた。ザビードZabīdにおいて土曜日（al-subūt）が開かれ、そこで悪しき行為が行われると、彼はエチオピアへ出立した。そして前述の年に亡くなるまで、ルーンRūnと呼ばれる村で暮らしたのであった。[al-‘Uqūd I: 112; cf. al-‘Aṭāyā: 341[3]]

ここでの「土曜日」は、「ナツメヤシの土曜日」として知られる、ナツメヤシの実の収穫期に行われる遊山の祭日のことを指している [家島訳III: 204 n.43; cf. Ghāya: 494]。老若男女が着飾って海辺のモスクへ向かい、酒を飲み、ふざけて踊りながら海へ入ったという。シャイフ・アブー・アッラビーゥは、こう

した非イスラーム的な行いに我慢ならなくなったのだろう。新天地を求めて東アフリカへ出立し、そのまま定住したのである。彼がエチオピアを選んだ背景は詳らかではないものの、地理的な近縁性や人的なつながりがあったことは想像に難くない。

こうした中でブライヒー al-Burayhī（d. 904/1499）が残しているあるシャイフの遍歴の記録は、イエメン出身者が望んでアラビア海周縁部を移動した事例を提示する。

> ミフラーフ・ジャァファルMikhlāf Ja‘farのハダド城砦ḥiṣn Khadadの東にあるムシャイラクal-Mushayraqで亡くなった者たちのひとりに、シャイフ・サーリム・アッディーンṢārim al-Dīn Dāwūd b. Ṣāliḥ al-Muṣannafがある。…彼の出身地はイッブIbbで、それからファラーウィー al-Farāwīへ移った。…（メッカにてスーフィズムに触れた後）彼のまちであるイッブへ戻った。…それから彼は、エチオピアへ出立した。そこの有名な島では、崇高なるアッラーの僕（‘abd）が、木々を食べ、（木々から流れ出る）水を飲んでいるのだ。その後彼は、彼のまちへ戻った。…そしてファラーウィーへ移り、835/1431-2年、亡くなった。[al-Burayhī: 64-6]

シャイフ・サーリム・アッディーンは、その経緯こそ不明なものの、「崇高なるアッラーの僕が、木々を食べ、（木々から流れ出る）水を飲んでいる」有名な島へ自ら渡航している。このようなエチオピアを一種の理想郷のようにみなす姿勢は、先述したファキーフ・アブー・アッラビーゥの記事とも共通する。もっとも、ファキーフ・アブー・アッラビーゥがエチオピアを永住の地に定めたことに対し、シャイフ・サーリム・アッディーンにとってエチオピアは遍歴の一通過点に過ぎなかった点が、大きく相違している。

以上に見たように、強制的にせよ自分の意志にせよ、イエメンにいることが難しくなったという後ろ向きな理由で東アフリカへわたった者がいた一方で、多分に伝説的な要素を含みつつもシャイフ・サーリム・アッディーンのよう

に積極的にアラビア海周縁部を遍歴した例も見られた。もっともこれらをもってイエメンから東アフリカへ知識人が頻繁に移動していたと述べることはできず、むしろ史料に特記されていることを考えれば、これらは稀有な事例であったと考える方が自然なのかもしれない。

2-2. 東アフリカからイエメンへわたった人々

東アフリカからイエメンへわたった人々の事例もまた、ラスール朝史料に残されている。たとえばティラーズ諸王国のうちイファトIfātを統治し続けていたワラースマゥ家は、ハック・アッディーンḤaqq al-Dīn（d. 776/1374）とサァド・アッディーンṢa‘d al-Dīn（d. 817/1415）の兄弟の治世期よりハラルHarārに逃れてムスリム勢力を取りまとめるなどして、ソロモン朝（1270-1868）に対してますますの抵抗を行うようになった。その際に、ソロモン朝との対決のための援助を求めてラスール朝スルタンに謁見した記事が、ラスール朝史料に見られる [Bughya: 99; Ta’rīkh: 81]。

また『書記官提要*Mulakhkhaṣ al-Fiṭan*』には、736/1335-6年、キルワからアデンへやって来たナースィル・アッディーンNāṣir al-Dīn Sharīf Mūsā b. Ḥusayn の船に載せられていたバカール（bakār）米に対し、カーディー（qādī。裁判官）・バドル・アッディーンBadr al-Dīn Ḥasan Sa‘īd b. Ḥasanが関税（‘ushr）を課した旨が記録されている [al-Mulakhkhaṣ: 21a]。この場合、ナースィル・アッディーンがキルワの出身者ではなく、キルワから帰還した船主であった可能性もある。

ほかにもバー・マフラマBā Makhrama（d. 947/1540）が、少年期に出会ったアーラの支配者であるサイードSa‘īd b. Muḥammad Mushammir al-Ash‘arīの逸話において、以下の記事を残している。

> ザイラゥの人々のひとりである商人イブン・アルカースィムMuḥammad b. ‘Umar b. Abī al-Qāsim al-Ḥaḍaramīは、素晴らしいモスクを（アーラに）建設した。ファキーフ・サイードが多くの本を残して亡くなると、前述のイ

ブン・アルカースィムやザイラゥの商人は、祝福を得られるように、それらの大部分を購入した。[Thaghr II: 91-2]

商人イブン・アルカースィムは、al-Ḥaḍaramīというニスバ（nisba。縁故名）が示すように、アラビア半島南部のハドラマウトに縁を持っており、ザイラゥで主に活躍するハドラマウト出身者であったのかもしれない。ここでは、ザイラゥの商人たちとその対岸に位置するアーラの間に密接な関係があったことが確認される。実際アーラは、アデン・ザイラゥ航路において中継地としても用いられる港町であった [馬場2017]。なおほかにも、ハドラマウト出身の商人がエチオピアのカルジュールKaljūrに定住していた例を、ジャナディー al-Janadī（d. 732/1332）が伝えている [Sulūk II: 422-3; Vallet 2010: 414]。

東アフリカ出身のムスリム知識人がイエメンで活躍した事例も、ラスール朝史料中に確認することができる。1331年夏、シャイフ・アブー・アルワリードAbū al-Walīd[4]の案内を得たマグリブ出身の旅行家イブン・バットゥータ Ibn Baṭṭūṭa（d. 770/1368-9）は、ジブラJiblaにて一人のファキーフと出会った。

そして、我々はジブラに着いた。そこは規模の点では小さいが美しい町で、ナツメ椰子や果物類があって、幾つもの川が流れている。シャイフ・アブー・アルワリードが来たことを聞くと、ファキーフ・アブー・アルハサン・アッザイライー Abū al-Ḥasan al-Zayla‘īは彼を手厚く歓迎し、自分のザーウィヤ（zāwiya。修道場）に迎え入れた。私は彼と一緒にそのファキーフに挨拶をした。我々は大変に快適な三日間をそこで過ごした。[家島訳III: 128　※一部に筆者による修正・加筆を施した]

アブー・アルハサン・アッザイライーは、al-Zayla‘īのニスバが示すように、東アフリカ沿岸部のザイラゥに縁を持つ人物である。ハズラジーは『真珠の首飾り』において、より詳細な情報を残している。

> 729/1329年、ファキーフであり公正な人物である、アブー・アルハサン・アッザイライー Abū al-Ḥasan ‘Alī b. Abī Bakr b. Muḥammad al-Zayla‘ī al-‘Uqaylī が亡くなった。（al-‘Uqaylī は）ワーディー・ナフラ Wādī Nakhla のサラーマ Salāma の村の支配者（ṣāḥib）であるウカイル ‘Uqayl b. Abī Ṭālib に由来するニスバである。彼らの起源は、エチオピアの村々のひとつであるビッタ Biṭṭa である。それゆえに彼らは、ザイライー家 Banū al-Zayla‘ī と呼ばれる。彼らのうち、最初にサラーマの村にたどり着いたものは、彼らの祖父であるムハンマドだった。彼はそこで結婚し、アブー・バクル Abū Bakr が生まれた。アブー・バクルはウカイル家 Ahl al-‘Uqaylīya の女性と結婚し、前述のアリー（アブー・アルハサンのこと）とその兄弟が生まれた。彼らは、公正と知の一族（bayt）である。アリーは敬虔なファキーフであり、多くの食べ物を振る舞った。彼の父と同様に、彼は幾度もの巡礼を行った。彼は前述の年のズー・アルヒッジャ月の終わりに、高貴なるメッカにおいて亡くなった。[al-‘Uqūd II: 53-4]

家島が指摘するように、アブー・アルハサンはイブン・バットゥータの訪問以前に既に亡くなっているため、実際には別の人物とイブン・バットゥータはジブラで会ったものと思われる [家島訳 III: 205-6 n.49]。ここでは、al-Zayla‘ī というニスバとともに出自に関するアイデンティティーを保ちつつ、エチオピア出身者がイエメン社会に知識人として溶け込み、時を超えて繁栄して行く様を読み取ることができる。

またブライヒーは、東アフリカ出身の別の一族について言及している。

> （タイッズの人々のうちに）シャイフにして公正なる人物であるジャマール・アッディーン Jamāl al-Dīn Muḥammad b. ‘Alī b. ‘Abd al-Raḥmān al-Jabartī al-‘Aqīlī al-Qurshī がいる。彼は祝福されたる家の人々のひとりである。…前述のシャイフ・ジャマール・アッディーンの祖父はシャイフ・アブド・アッラフマーン ‘Abd al-Raḥmān であり、彼には七人の高貴な息子た

ちがいた。彼は海の向こうのエチオピアの地にあるM/s/kと呼ばれる場所にある彼の出身地を離れ、イエメンへ入った。彼はそこで崇高なるアッラーに仕えて過ごした。彼はザビードのまちに数日間滞在し、そこで亡くなった。その息子であるアリー ‘Alīはそこで数日間過ごして後、タイッズへ移動し、そこに落ち着いた。彼は彼らのうち、ムダージルal-Mudājirに住んだはじめての人物である。…前述のシャイフ・ジャマール・アッディーンは高貴なるメッカへ向かい、巡礼を果たし、預言者の墓を参った。それからタイッズへ戻り、病床に着いた。…830/1426-7年、疫病の痛みがために亡くなった。[al-Burayhī: 224-5]

al-Jabartīは、エチオピアに居住するムスリムを指すJabartに由来するニスバである[E. Ullendorff, “DJABART”, *EI*²]。ジャマール・アッディーンの祖父がイエメンへ到来して以降、その一族はタイッズを中心に展開した。al-‘Aqīlīのニスバをal-‘Uqaylīと読むことも可能であり、その場合彼もまた、前述のウカイル家と何らかのつながりがあったこととなる。またal-Qurshīは、ティハーマに居住した預言者ムハンマドの出身部族であるクライシュ族Quraysh や [Irtifā‘: 75 n.1]、あるいは、ザビード近辺のアシャーイル族al-Ashā‘irに属するクラーシーヤ族al-Qurāshīya [al-Ḥajarī 2004 IV: 648]に由来するニスバである。ジャマール・アッディーンの一族はイエメンへ到達して以降、イエメンに既に居住していた人々と姻戚関係を結ぶなどして、イエメンでの基盤を固めていったものと考えられる。

先の二例と異なり、一族を形成した様子はないものの、アラビア海をわたってイエメンへ流入した知識人の死亡録も見られた。

この年（741/1340-1年）、ファキーフにしてイマーム、公正な人物であるアブー・アルアティークAbū al-‘Atīq Abū Bakr b. Jibrīl b. Awsām al-‘Adalīが亡くなった。彼はファキーフであり公正で、気前がよく教養があり、敬虔で高貴な人であった。彼の家族（ahl-hu）はスーダーン地方におり、信仰

と善行の人々である。[al-‘Uqūd II: 65; cf. al-Sulūk II: 132; al-‘Aṭāyā: 206-7]

ニスバであるal-‘Adalīについて、スルタン・アフダルの著作の当該ファキーフの説明箇所には、「（al-‘Adalīは）アダルal-‘Adalとして知られるスーダーンの部族に由来する」[al-‘Aṭāyā: 206-7]とある。ワラースマゥ家がハラルに建設した支配体制がアダルと呼ばれていることを踏まえれば、このファキーフがハラル近辺に縁を持っていた可能性がある。この記事からは、スーダーンに家族を残して単身でイエメンへ赴き、客死するムスリム知識人が存在したことが伺われる。なお中世アラビア語史料においてスーダーンの語が意味するところは幅広く、西はモロッコ南部から東は紅海に至る、サハラ以南の一帯を指し得た[A. S. Kaye, “SŪDĀN”, *EI*²]。したがって、彼の家族の居地の特定は難しい。

東アフリカ出身者の中には、ラスール朝のワズィール（wazīr。宰相）に登り詰める者もいた。スルタン・ムジャーヒドal-Malik al-Mujāhid（r. 721/1321-722/1322, 722/1322-778/1377）の治世に活躍したある人物について、バー・マフラマは以下のように書いている。

> イブン・ムゥミンJamāl al-Dīn Muḥammad b. Mu’min[5]は、スルタン・ムジャーヒドのワズィールたちのうちのひとりである。彼の出自は、ザイラゥ地方（nāḥiya）のスーダーンのまちにある。彼は、ファキーフ（faqīh。法官）であり上品で、教養があり、字が美しく、心が広く、志が高かった。彼の志はスルタンに仕える（al-khidam al-sulṭānīya）ところにまで上り、ついにはその主要な者たちのひとりとなった。[Thaghr II: 227]

おそらくはザイラゥより出航し、イエメンへ至ったこの人物は、培われた種々の能力故に、スルタン・ムジャーヒドのもとで大成した。彼はカーディーとも記録されており [al-‘Uqūd II: 40]、イスラーム法学に関する優れた知識を有していたと見られる。

一方で、東アフリカ出身と思しき人々が奴隷としてイエメンへ流入したこ

とを、複数の史料が伝える [馬場2017]。アデン港課税品目録には、エチオピアやザンジュ Zanj からやって来た、男性奴隷であるアブドや女性奴隷であるジャーリヤ、去勢者であるハーディムが列挙されている。彼らは部族や個人に所有されるほか、ラスール朝宮廷において家内労働に従事した。ハーディムの中には後にタワーシーと呼ばれ、ラスール朝下で政治・軍事の双方に強い影響力を有するに至る者も見られた。13世紀頃にはエチオピア・イエメン間において奴隷交易が習慣化しており、アデンを介してタイッズ近郊のサァバート al-Thaʻbāt へ奴隷が送られていた [Vallet 2010: 415]。男性器を切除しなかったアブドの中にも、イエメンで高徳の人物として名を馳せ、人名録に記されるに至った人物がいた。たとえばバー・マフラマは、エチオピア出身のアブドであるライハーン Rayḥān b. ʻAbd Allāh al-ʻAdanī を取り上げて、その徳の高さについて述べている [Thaghr II: 78]。

このように東アフリカからは、知識人や亡命者、そして奴隷が、イエメンへ流入していた。その背景にはラスール朝という王朝が人的資源を必要としていたことに加えて、特にザビードが学問の中心地として発展し、様々な人々を呼び寄せ続けていたことが挙げられる [栗山2012: 229-67]。彼らの中には、イエメン社会へ溶け込み、ラスール朝支配体制の高位に至ったり、人名録に記載されるような知識人あるいは有徳の人となったりする者もいた。一方で、ニスバや人名録中の出自に関する言及は、自他ともに彼らが東アフリカ出身者であったという認識を共有し続けていたことを示す。彼らの往来の頻度や人数を測ることはできないものの、特に近隣のエチオピアは、イエメンにとって人材の供給源であったとみなすことは可能だろう。この点ヴァレが指摘するように、ザンジュやモガディシュとつながりを持った商人や知識人の記述が史料上にあまり見られないことと [Vallet 2010: 560-1]、対照をなす。

3．物をめぐって

3-1．交易

13世紀後半、交易品の量の測定こそできないものの、イエメン・東アフリ

カ交易が発展したことが、ヴァレによって指摘されている [Vallet 2010: 422]。実際、13世紀以降にまとめられた複数の農事暦や行政文書集、紅海技術書が、アデン・ザイラゥ航路やアデン・モガディシュ航路、アデン・バルバラ航路について幾度も言及しており、船舶の往来があったことが伺われる [Irtifāʻ: 112-3, 128-9; Tabṣira/Varisco 1994; Fuṣūl; Tawqīʼāt/Varisco 1985; Vallet 2010: 403; 栗山2014]。その背景には、ラスール朝期には従来よりも紅海の海運が発達し [Masālik: 330; cf. Nūr I: 107-8; al-Shamrookh 1996: 219-27]、マムルーク朝（648/1250-923/1517）やメッカ・シャリーフ政権、ラスール朝からの干渉を避けるためにカーリミー商人が活動の中心をエチオピアに移したことで、エチオピア交易が活発化したことが挙げられる。アイザーブʻAydhābの衰退と、それに伴うサワーキンSawākinやダフラク島Dahlakの発展は、こうした紅海情勢の変化を受けてのものであった [家島2006: 361-91]。

『知識の光*Nūr al-Maʻārif*』収録のエチオピアにおける交易に関する三種類の記事は [Nūr I: 359-67]、12世紀後半から13世紀半ばの状況を反映していると見られる [Vallet 2010: 405-7]。そこでは、ラバや鞣生皮、鞣革マット、寝椅子、霊猫香、麝香猫、金、象牙、蜂蜜、奴隷などが、銀の重さではかられた上で、インドやエジプトから運ばれる布（bazz）と交換されていた。イファトやカルジュールにおいてはエジプトの銀貨が限定的に使用され、貨幣は主に蓄財用にまわったとヴァレは考えている [Vallet 2010: 412]。支配者による介入は限られており、税の徴収や霊猫香や金を支配者が購入する際に割引がなされた程度であった [Vallet 2010: 406-7, 416]。このうちたとえば象牙は、カルジュールを出立後ザイラゥへ運ばれ、そこからアデンへ輸送されていた。

『知識の光』所収のアデン港課税品目録には、東アフリカ由来の産物について、以下の記事が見られる。

> バラービル羊（ghanam barābir）－マイトMayṭやマルガッワMarghawwīya、ザイラゥから。一頭につき1/4ディーナール。[Nūr I: 445]

マラバール・ビンロウジ（fūfal Mulaybārī）－100000個ごとに11 + 1/6 + 1/8ディーナール。仲介税（dilāla）は1/8 + 1フィルス（fils）。モガディシュからのもの（Maqdishī）とズファールからのもの（Ẓufārī）も同様である。[Nūr I: 446]

具体的な産地情報は欠けるものの、マイトやマルガッワ、ザイラゥといったアラビア海沿岸の港から、バラービル羊が積み出されていたことがわかる。バラービル羊はこの一帯の特産物で、イエメンで産出する他の羊よりも高額であった[6]。またビンロウジについては、インド亜大陸のマラバールの他に、モガディシュやズファールからも運ばれていたものと見られる。

東アフリカは13世紀のラスール朝宮廷にとって、いくらかの食材の供給元であった。先述したバラービル羊は日々の食事で消費される他に、祝祭時には王族やアミールへの下賜品として用いられた [馬場2017]。動物性油脂（wadak）についてはアデン港課税品目録に記載は見られないものの、アデンからは動物性油脂が宮廷へ輸送されていること、ザイラゥやダフラク島に由来する動物性油脂が『知識の光』に見られること [Nūr I: 522]、1331年頃に東アフリカを旅したイブン・バットゥータがザイラゥの動物性油脂が有名であったと報告していることから [家島訳III: 137]、ザイラゥなどから輸入されていた産物であった可能性は高い。ほか、モガディシュからもたらされた砂糖が宮廷で用いられた例も、わずか一例ではあるが、『知識の光』に見られる [Nūr I: 106]。

一方でザイラゥの北方の紅海に位置するダフラク島は、エジプトから到来する商品の経由地として機能していた。『知識の光』には、エジプトの紅海沿岸の港町であるアイザーブよりダフラク島へ運ばれ、マクス税（maks）と呼ばれる雑税を課された商品の一覧が含まれている [Nūr I: 460]。その中には、ルビーや銀、辰砂（al-zanjafar al-mār）、マスチック、エジプト織物（al-bazz al-Miṣrī）などが列挙されている。アイザーブは1370年代頃まで紅海の主要な交易港として機能していたことが明らかにされており [家島2006: 361-91]、12世紀後半から13世紀半ばの状況を反映するこの記事は、まさにアイザーブの繁栄

期の様子の一端を伝える。ダフラク島は初期イスラーム期にイスラーム化して以降 [Trimingham 1952: 46-7]、ウマイヤ朝時代中期の96/715年前後からアッバース朝時代初期の141/758-9年まで、約50年間にわたって遠島先として用いられていた [高野2007]。その後同島は、イスラーム世界への奴隷の供給元として機能し、エジプトを中心とする巨大な交易ネットワークの基幹部となって行く。

エチオピアやザイラゥなどの海岸部の港、ダフラク島を除けば、交易品の積出地あるいは産地として記述される東アフリカの地名は、ラスール朝史料にほとんど見られない。他の地域から輸出される産物であってもこうした紅海沿岸部の港町を経由してイエメンへ輸入されていたことが、その主因であろう。

3-2. 贈呈

ラスール朝スルタンのもとへは、東アフリカの種々の支配者より様々な贈呈品が送られていた。たとえば『年代記』には、以下のような記事を見出すことができる。

> アジャムの地Barr al-‘Ajamのシャイフ・ミスマールMismārからの贈物の到着。そのうちには象やキリン、多くの奴隷（raqīq）が含まれる。それは、780年ジュマーダーII月/1378年8-9月のことであった。[Ta’rīkh: 37-8]

> 象や野生獣、珍しい品々から成る、ダフラク島の支配者の贈物の到着。それは、787年/1385-6年のことであった。[Ta’rīkh: 43]

> ザンジュの地から贈物が届いた。その中には、イエメンの地に入ってきたことがない驚くべきものが含まれていた。それは、790年祝福されたるシャッワール月28日/1388年11月7日のことであった。[Ta’rīkh: 47]

> 791年ラジャブ月/1389年7-8月、サワーキンの支配者から価値ある贈物が届

いた。そのうちには、象や焚香料、貴重品などが含まれていた。[Ta'rīkh: 49]

ここでは、象をはじめとした動物が特に記されている。象やキリンはイエメンの自然環境下では生息していなかったため、史料著者の関心を引いたのだろう。ザンジュからの贈物の中には、790/1388年段階において、「イエメンの地に入ってきたことがない驚くべきもの」が見られたという。アラビア語史料－中のザンジュは、エチオピアやアジャムの地の南、東アフリカ海岸に住むバントゥー系諸言語の集団を指した [家島訳III: 219-20 n.102; 家島1993: 312-44]。贈物の候補としては、奴隷に加えて、象や大亀、ワニ、豹、竜涎香、タカラガイ、鉱物が想定されるが [鈴木2015]、ここでの仔細については不明である。なおラスール朝史料全体を通して、アジャムの地やサワーキン、ザンジュに関する記述は、エチオピアやザイラゥと比して非常に少ない。そうした中でこれらの贈呈記事は、14世紀後半において、当地に何らかの支配権力が存在したこと、ラスール朝との間で外交関係が築かれ得たことを示唆する。

一方でラスール朝史料には、イエメンから東アフリカへ運ばれた産物に関する情報はほとんど見られない。運び出される産物は史料著者にとっては既知のものであるため、運び込まれる産物と比すればその関心を引きにくいことが一因と考えられる。前述のように、エチオピアの市場では物々交換が行われており、その際にアデンから輸入されたエジプトやインドの織物が使用された [Vallet 2010: 412-3]。また、金貨もアデンからもたらされたと考えられるが、エジプトのカーミリー銀貨と同様に、市場での交換手段というよりもむしろ蓄財用に用いられたとヴァレは指摘する。

4．情報をめぐって

4-1．伝達される異常事態

東アフリカからは、物や人だけではなく、情報もまたイエメンへ伝えられていた。そうした中でも史料に特記されるものは、非日常的な出来事に限られる。たとえばハズラジーは、802/1399-400年の記事で以下の情報を伝えている。

ファキーフ・ナーシリー ‘Alī b. Muḥammad al-Nāshirī が、幾人かの海上旅行者に聞いた話として、以下を私に伝えた。スーダーン地方において、幾日間にわたって絶え間なく10回に満たないほどの大きな地震が起き、多くの土地や山が崩れ落ちた。そのうちのある地方（nāhiya）では大規模な煙を伴う大火が生じ、人々は逃げ出した。火と煙は、幾日間かにわたってとどまり続けた。煙は具現化し、山となった。これ以前には、そこでは山々の類は知られていなかった。これらのすべてが、前述の年の後半に起こった。アッラーのみぞ知り給う。[al-‘Uqūd II: 258]

スーダーンで噴火活動が活発化し、それに伴って大規模な地震や火砕流が発生して溶岩ドームが形成されたことを、この記事は伝えている。実際、エジプト南部のスーダーンには、カメルーンより中央アフリカ切断帯が伸びており、複数の火山が見られる。もっとも、前述のようにスーダーンが指す地域は広大であり、正確な場所を特定することは難しい。複数の海上旅行者からファキーフ、そして著者ハズラジーへ伝えられたとするこの記事は、東アフリカの出来事がイエメンへ伝達される経路を示すものとしても興味深い。このファキーフはハズラジーとともに794/1392年にスルタンによって催された宴席に出席しており、詩人としても知られた [馬場2017]。

また、後代のターヒル朝期の出来事ではあるが、イブン・アッダイバゥは以下の記事を残している。

（900年）ジュマーダーI月5日/1495年2月10日、バルバラの島において大きな洪水（ṭūfān）が起こった。その港（bandar）では、26の船（al-sufn）が沈んだ。その中には、2000タンム（al-ṭanm）[7]を超える穀物（al-ṭa‘ām）や多くの奴隷があった。[Bughya: 208]

バルバラはアデンのほぼ真南に位置する東アフリカの港町の他に、ソコトラ島をも指し得た[Varisco 1994: 225]。本記事におけるバルバラがいずれを指すの

か、判然としない。前述のようにインド洋においては10月から3月にかけて北東季節風が卓越するが、この季節風は紅海へ吹き込むところで南風に転じ、紅海を北上する [Varisco 1994: 222-31; Margariti 2007: 40, 228 n.23; 栗山2014: 291-2]。したがって10月から3月の間には、エジプトへ向かう船がアラビア海周縁部に到着し、港が賑わった。そうした船が多く集まる時期に起きた水害がために、26隻の船が沈むという事態となったものと考えられる。

4-2. 共有される異常事態

東アフリカの陸地やその沿岸部で生じる異常事態は、イエメンにとって、対岸の火事に終わるものではなかった。たとえば、ターヒル朝期の記事として、イブン・アッダイバゥは以下のように書き残している。

> （910年）サファル月19日金曜日/1504年8月11日の夜、ザビードのまちで大きな地震が起こった。また、この夜、ザイラゥのまちで非常に激しい地震が起こった。いくつかの家が崩れ落ち、人々は海岸へ逃げ出した。彼らは、朝になるまで居地へは戻らなかった。[al-Faḍl: 109]

16世紀初頭、おそらくはバーブ・アルマンダブ海峡付近を震源とした広域に及ぶ地震が生じ、イエメンと東アフリカの両方に大きな被害をもたらした。この記事には書かれていないが、イエメン側のグラーフィカGhulāfiqaやアーラ、東アフリカ側のアワーン‘Awānなど、ザビードとザイラゥの間にある港町も、この災禍に見舞われたことだろう。

イエメンにおいて実害こそなかったものの、紅海で起こった噴火がイエメンで観察された事例も見られる。

> その年の前年、すなわち835/1431-2年、カマラーン島Kamarānとダフラク島の間の海中にある山で、火事が起こった。火や煙が現れたのだ。日中のように明るい雷（の音）を、ある人物は聞いたという。信用できる者が、

以下のように伝えた。私はルハイヤal-Luḥayyaの方から聞いた、と。その煙は、積もった雲のように、スルドゥドal-Surdudの方から見られた。そのすべてが燃えると、それらの列島のもうひとつの山に火が現れた。それは七つあり、al-’/b/‘/laと呼ばれる。[Qurra: 481]

紅海にはアフリカ大陸から延びる大地溝帯が南北に走っているため、いくつかの火山が散在する [Jónsson and Xu 2015]。2011年と2013年にはイエメン沖のズバイル諸島Juzar al-Zubayrで噴火が起き、新たな島を形成したことは、記憶に新しい。地図3に示すように、カマラーン島とダフラク島の間にはズバイル諸島とジャバル・タイル島Jazīra Jabal al-Ṭayrに火山が見られ、カマラーン島の北東に所在するルハイヤや南東に位置するスルドゥドから、双方ともに観察され得る。列島のうちに複数の火山が含まれていることから、ここで噴火した火

※Google Mapsをもとに筆者作成。

地図3 ズバイル諸島と周辺の島々

山はズバイル諸島であったと推測される。

一方で、物価の高騰という異常事態がイエメンと東アフリカの双方で同時に起こったことを示す記事も見られる。

> この年、すなわち884年ラビーゥ月1日/1479年1月1日、イエメンにおいてひどい物価の高騰が起き、886年まで続いた。ジュマーダーII月には、よりひどくなった。ザビードやタイッズ、アデン、山岳地帯、サナアṢan‘ā’、サァダṢa‘da、シフル、モガディシュ、ザイラゥに広がった。ザイラゥでは（特に）ひどく、数日間にわたって穀物が消え、人々が皮を食べるほどであった。それゆえに、人々は疲弊し、急激に亡くなった。そのすぐ後に激しい雨が降り、多くの洪水が生じた。ザビードでは、ワーディー（wādī。枯れ谷）の多くに水が流れ、泉が決壊し、（水が）過剰に増えた。ザビードのワーディーでは、多くの生き物（khalq）を流す大きな洪水が生じた。人々は亡くなり、生産物（al-intifā‘）はそれで押しつぶされ、（従来の）水の流れ（al-sharj[8]）や土地を破壊した。[Bughya: 160; Qurra: 519]

この記事で着目すべきは、イエメンで生じた物価の高騰がイエメン全域に及んだばかりではなく、遠く離れたシフルや、対岸のザイラゥ、さらにははるか南方のモガディシュにまで伝播していることである。本稿でこれまでに見たように人や物、情報の交流がイエメンと東アフリカの間であったことと合わせて考えれば、両地域がアラビア海やインド洋によって明確に分かたれるものではなく、むしろ海を媒介として相互に連関していたことを、共有される異常事態の例は表している。

おわりに

アラビア海や紅海、インド洋は、イエメンと東アフリカを断絶するものではなく、両地域で生じた人や物、情報を適度に往来させる役割を担った。ラスール朝が東アフリカへ政治的軍事的に影響を及ぼすこともあったが、それらはい

ずれも海岸部の一部のまちに限られており、長期的・継続的・積極的なものではなかったように見受けられる[9]。見方を変えれば、ラスール朝の政治体制は東アフリカへの領域の拡張を必須としておらず、イエメンに依拠することで十分に機能していたと捉えることもできよう。

一方で、ラスール朝史料における東アフリカに関する記述が全体として限られていたことに注意を払う必要がある。ラスール朝下イエメンにとっての東アフリカは人や物、情報の供給源であって、イエメンから東アフリカへ向かう流れは相対的に少なかったことも、その一因であろう。また、往時のムスリムにとってアフリカ大陸は不可知と可知が混在する世界であり続けたとの鈴木の指摘を踏まえれば [鈴木2005; 鈴木2015]、積極的に東アフリカへ興味を持つ人々はイエメン側には少なかったのかもしれない。ラスール朝史料著者の関心の限界もそこにあって、彼らは東アフリカの状況を事細かに知ろうとはせずに、折に触れて入って来る目新しい情報を記録するにとどまったのである[10]。

イエメンと東アフリカは、過度な干渉ではなく適度な往来を可能とする海を仲介としてつながり続けた。そうしたイエメンと東アフリカの間の制限された交流と、ラスール朝史料著者の東アフリカへの関心の限界は、互いに影響を与え合うものであっただろう。ラスール朝崩壊以降、ターヒル朝とマムルーク朝による支配を経て、オスマン朝（698/1299-1341/1922）やザイド派イマーム勢力がイエメンを統治する。また、東アフリカの一帯は、ポルトガルのインド洋進出により既存の政治的経済的なシステムに大幅な修正を迫られることとなる。こうした中でイエメンと東アフリカがどのような交流を重ねていたのかという点については、未だ明らかになっていない。海を媒介とした両地域の連関の実態を通時的に検討することを今後の課題として、筆を置く。

文献目録

一次史料

al-ʻAṭāyā: al-Afḍal, *Kitāb al-ʻAṭāyā al-Sannīya wa al-Mawāhib al-Hanīya fī al-Manāqib al-Yamanīya*, ʻA. ʻA. A. al-Khāmirī (ed.), Ṣanʻāʾ: Iṣdārāt Wizāra al-Thaqāfa wa al-Siyāḥa, 2004.

Ta'rīkh: anon., *Ta'rīkh al-Yaman fī al-Dawla al-Rasūlīya*, H. Yajima (ed.), Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, 1976.

Tawqī'āt/Varisco 1985: anon., *al-Tawqī'āt fī Taqwīm* ("al-Tawqī'āṭ fī Taqwīm al-Zirā'a al-Majhūl min Aṣl Mulūk Banī Rasūl [Details from an Anonymous Agricultural Almanac of the Rasulid Period]", *Dirāsāt Yamanīyya*, 20), D. M. Varisco (ed.), Ṣan'ā': Markaz al-Dirāsāt al-Buḥūth al-Yamanī, 1985, 192-222.

Afḍal: anon., *The Manuscript of al-Malik al-Afḍal al-'Abbās b. 'Alī b. Dā'ūd b. Yūsuf b. 'Umar b. 'Alī Ibn Rasūl: A Medieval Arabic Anthology from the Yemen*, D. M. Varisco and G. R. Smith (eds.), Warminster: E. J. W. Gibb Memorial Trust, 1998.

Fuṣūl: anon., *Fuṣūl Majmū'a fī al-Anwā' wa al-Zurū' wa al-Ḥiṣād* ("An Anonymous 14th Century Almanac from Rasulid Yemen", *Zeitschrift für Geschichte der Arabisch-Islamischen Wissenchaften*, 9), D. M. Varisco (ed.), 195-228. (The original manuscript is Afḍal: 25-27)

Nūr: anon., *Nūr al-Ma'ārif fī Nuẓum wa Qawānīn wa A'rāf al-Yaman fī al-'Ahd al-Muẓaffarī al-Wārif*, M. 'A. Jāzim (ed.), 2 vols., Ṣan'ā': Centre Français d'Archéologie et de Sciences Sociales, 2003-2005.

Irtifā': anon., *Irtifā' al-Dawla al-Mu'ayyadīya: Jibāya Bilād al-Yaman fī 'Ahd al-Sulṭān al-Malik al-Mu'ayyad Dāwūd b. Yūsuf al-Rasūlī al-Mutawaffī Sana 721 h. / 1321 m.*, M. 'A. Jāzim (ed.), Ṣan'ā': Centre Français d'Archéologie et de Sciences Sociales, 2008.

Tabṣira/Varisco 1994: al-Ashraf, *al-Tabṣira fī 'Ilm al-Nujūm* (*Medieval Agriculture and Islamic Science: The Almanac of a Yemeni Sultan*), D. M. Varisco (ed.), Washington: University of Washington Press, 1994, 41-60.

Thaghr: Bā Makhrama, *Ta'rīkh Thaghr 'Adan*, O. Löfgren (ed.), al-Qāhira: Maktaba Madbūlī, 1991.

al-Burayhī: al-Burayhī, *Ṭabaqāt Ṣulaḥā' al-Yaman*, 'A. M. al-Ḥibshī (ed.), Bayrūt: Dār al-Kutub, 1983.

Mulakhkhaṣ: al-Ḥusaynī, *Mulakhkhaṣ al-Fiṭan* (*Medieval Administrative and Fiscal Treatise from the Yemen: The Rasulid Mulakhkhaṣ al-Fiṭan by al-Ḥasan b. 'Alī al-Ḥusaynī*), G. R. Smith (ed.), Oxford: Oxford University Press, 2006.

Bughya: Ibn Dayba', *Bughya al-Mustafīd fī Ta'rīkh Madīna Zabīd*, 'A. M. al-Ḥibshī (ed.), Ṣan'ā': Maktaba al-Irshād, 2006.

al-Faḍl: Ibn al-Dayba', *al-Faḍl al-Mazīd 'alā Bughya al-Mustafīd fī Akhbār Madīna Zabīd*, 'A. M. al-Ḥibshī (ed.), Ṣan'ā': Maktaba al-Irshād, 2007.

Qurra: Ibn al-Dayba', *Kitāb Qurra al-'Uyūn fī Akhbār al-Yaman al-Maymūn*, M. 'A. al-Akwa' (ed.), Ṣan'ā': Maktaba al-Irshād, 2006.

Masālik: Ibn Faḍl Allāh al-'Umarī, *Masālik al-Abṣār fī Mamālik al-Amṣār*, 2, F. Sezgin (ed.), Frankfurt am Main: Institute for the History of Arabic-Islamic Science at the Johann Wofgang Goethe University, 1988.

Simṭ: Ibn Ḥātim, *Kitāb al-Simṭ al-Ghālī al-Thaman fī Akhbār al-Mulūk min al-Ghuzz bi al-Yaman* (*The Ayyūbids and Early Rasūlids in the Yemen (567-694/1173-1295)*, 1), G. R. Smith (ed.), London:

Luzac for the Trustees of the E. J. W. Gibb Memorial, 1978.

al-Mujāwir: Ibn al-Mujāwir, *Ṣifa Bilād al-Yaman wa Makka wa Ba'ḍ al-Ḥijāz al-Musammāt Ta'rīkh al-Mustabṣir*, O. Löfgren (ed.), Leiden: E. J. Brill, 1951.

al-Sulūk: al-Janadī, *al-Sulūk fī Ṭabaqāt al-'Ulamā' wa al-Mulūk*, 2 vols., M. 'A. al-Akwa' (ed.), Ṣan'ā': Makaba al-Irshād, 1993-1995.

al-'Uqūd: al-Khazrajī, *al-'Uqūd al-Lu'lu'īya fī Ta'rīkh al-Dawla al-Rasūlīya*, 2 vols., M. B. 'Asal (ed.), Bayrūt: Dār al-Ādāb, 1983 (1911-1914).

Ghāya: Yaḥyā b. al-Ḥusayn, *Ghāya al-Amānī fī Akhbār al-Qaṭr al-Yamānī*, 2 vols., S. 'A. 'Āshūr (ed.), al-Qāhira: Dār al-Kutub al-'Arabī li al-Ṭibā'a wa al-Nashr, 1968.

家島訳: イブン・バットゥータ（著）, 家島彦一（訳）『大旅行記』（全八巻）, 平凡社, 1996-2002.

二次資料

EI[2]: *The Encyclopaedia of Islam New Edition, Leiden*: E. J. Brill, 1954-2004.

Aḥmad, Muḥammad 'Abd al-'Āl. 1980. *Banū Rasūl wa Banū Ṭāhir wa 'Alāqāt al-Yaman al-Khārijīya fī 'Ahd-humā 628-923/1231-1517*, al-Iskandarīya: al-Hay'a al-Miṣrīya al-'Āmma li al-Kitāb.

Braukämper, U. 2002. *Islamic History and Culture in Southern Echiopia: Collected Essays*, Hamburg: LIT Verlag Münster.

Bulakh, M. and L. Kogan. 2013. "Towards a Comprehensive Edition of the Arabic-Ethiopic Glossary of al-Malik al-Afḍal. Part I: New Readings from the First Sheet", *Aethiopica*, 16, 138-48.

Bulakh, M. and L. Kogan. 2014. "Towards a Comprehensive Edition of the Arabic-Ethiopic Glossary of al-Malik al-Afḍal. Part II: New Readings from the Second Sheet", *Aethiopica*, 17, 152-68.

Bulakh, M. and L. Kogan. 2015. "Towards a Comprehensive Edition of the Arabic-Ethiopic Glossary of al-Malik al-Afḍal. Part III: New Readings from the Third Sheet", *Aethiopica*, 18, 56-80.

Bulakh, M. and L. Kogan. 2016. *The Arabic-Ethiopic Glossary by al-Malik al-Afḍal: An Annotated Edition with a Linguistic Introduction and a Lexical Index*, Leiden: Brill.

al-Fīfī, M. Y. 2005. *al-Dawla al-Rasūlīya fī al-Yaman: Dirāsa fī Awḍā'-hā al-Siyāsīya wa al-Ḥiḍārīya 803-827 h. /1400-1424 m.*, Bayrūt: al-Dār al-'Arabīya li al-Mawsū'āt.

Golden, P. G. (ed.) 2000. *The King's Dictionary: The Rasūlid Hexagot*, Leiden: E. J. Brill.

al-Ḥajarī. 2004 (1984). *Majmū' Buldān al-Yaman wa Qabā'il-hā*, Ibn 'Alī al-Akwa' (ed.), 4 vols. in 2, Ṣan'ā': Maktaba al-Irshād.

Hinz, W. 1955. *Islamische Masse und Gewichte: Umgerechnet ins Metrische System*, Leiden: E. J. Brill.

Jāzim, M. A. 2013. "Un manuscrit administratif et fiscal du Yémen rassoulide: *l'Irtifā' al-dawla al-mu'ayyadiyya", Documents et histoire Islam, VIIe - XVIe siècle*, A. Regourd (ed.), Genève: Librairie Droz S. A., 155-74.

Jónsson, S. and W. Xu. 2015. “Volcanic Eruptions in the Southern Red Sea during 2007-2013”, *The Red Sea: The Formation, Morphology, Oceanography and Environment of a Young Ocean Basin*, N. M. A. Rasul and I. C. F. Stewart (eds.), Berlin: Springer Berlin Heidelberg, 175-86.

Margariti, R. E. 2007. *Aden and the Indian Ocean Trade:150 Years in the Life of a Medieval Arabian Port*, Chapel Hill: The University of North Carolina Press.

Piamenta, M. 1990-1991. *Dictionary of Post-Classical Yemeni Arabic*, 2 vols., Leiden: E. J. Brill.

Serjeant, R. B. 1974. “The Ports of Aden and Shihr (Medieval Period)”, *Les Grandes Escales I. Recueils de la Société Jean Bodin*, 32, 207-24.

al-Shamrookh, N. A. 1996. *The Commerce and Trade of the Rasulids in the Yemen, 630-858/1231-1454*, al-Kuwait: Kuwait University.

Tamrat, T. 1977. “Ethiopia, the Red Sea and the Horn”, *The Cambridge History of Africa*, 3, Cambridge: Cambridge University Press, 98-182.

Trimingham, I. 1952. *Islam in Ethiopia*, London: Oxford University Press.

Vallet, E. 2010. *L’Arabie marchande: État et commerce sous les sultans rasūlides du Yémen (626-858/1229-1454)*, Paris: Publications de la Sorbonne.

Varisco, D. M. 1994. *Medieval Agriculture and Islamic Science: The Almanac of Yemeni Sultan*, Washington: University of Washington Press

アルヴァレス, フランシスコ（著）, 池上岑夫ほか（訳）1993 (1980).『エチオピア王国誌』（大航海時代叢書第II期第四巻）, 東京: 岩波書店.

石川博樹 2009.『ソロモン朝エチオピア王国の興亡―オロモ進出後の王国史の再検討―』東京: 山川出版社.

栗山保之 2012.『海と共にある歴史―イエメン海上交流史の研究―』東京: 中央大学出版部.

栗山保之 2014.「インド洋船旅の風―ポルトガル来航期におけるアラブの航海技術研究の一齣―」『地中海世界の旅人―移動と記述の中近世史―』東京: 慶應義塾大学言語文化研究所, 285-310.

高野太輔 2007.「初期イスラム時代の遠島」『大東文化大学紀要（人文科学）』45, 211-30.

鈴木英明 2005.「カンバルー島の比定をめぐる新解釈」『オリエント』48(1), 154-70.

鈴木英明 2015.「驚異としてのアフリカ大陸―中世アラビア語地理文献に見えるザンジュ地方―」『〈驚異〉の文化史―中東とヨーロッパを中心に―』名古屋: 名古屋大学出版会, 290-305.

馬場多聞 2017.『宮廷食材・ネットワーク・王権―イエメン・ラスール朝と13世紀の世界―』福岡: 九州大学出版会.

家島彦一 1993.『海が創る文明―インド洋海域世界の歴史―』東京: 朝日新聞社.

家島彦一 2006.『海域から見た歴史―インド洋と地中海を結ぶ交流史―』名古屋: 名古屋大学出版会.

注

1 『アフダル文書集』所収の六言語辞書については、英訳を付された上でゴールデンらによって既に出版されている [Afḍal: 186-206; Golden ed. 2000]。近年、ミュスがアラビア語－ゲエズ語・アムハラ語辞書のドイツ語訳を発表し（Muth, F.-C. 2009–2010, “Frühe Zeugnisse des Amharischen und der Gurage-Sprachen in einer polyglotten Wortliste von Al-Malik Al-Afḍal (gest. 778/1377)”, *Folia Orien-talia*, 45/46, 87–109）、ブラフとコーガンがさらに詳細な解説を付した訳注を刊行している [Bulakh and Kogan 2013; Bulakh and Kogan 2014; Bulakh and Kogan 2015; Bulakh and Kogan 2016]。

2 この時期のエチオピア周辺の政治変動については、以下の文献を参照。Braukämper 2002; Tamrat 1977; Trimingham 1952; アルヴァレス 1993。

3 スルタン・アフダルの著作では、このファキーフのクンヤ（kunya。添え名）はアブー・マンスール Abū Manṣūr となっている [al-‘Aṭāyā: 341]。

4 Ismā‘īl b. Aḥmad b. Mūsā b. ‘Alī b. ‘Umar b. ‘Ujayl のこと。家島が指摘するように、彼はイブン・バットゥータの訪問以前に亡くなっており、実際には別のウジャイル家の人物であったと考えられる [家島訳 III: 205 n.48]。なおウジャイル家は、代々多くの優れた学者やスーフィー聖者を輩出したことで知られる。父親であるアフマド Aḥmad b. Mūsā がメッカ巡礼を行う時には多くの巡礼者が同伴し、「イブン・ウジャイルのキャラバン隊」と呼ばれた [al-‘Uqūd I: 255-9; 家島訳 III: 128-9, 204 n.45, 206 n.50]。

5 彼はハズラジーの著作において、スルタン・ムジャーヒド期であるヒジュラ暦 725-36 年の記事に頻出する [al-‘Uqūd II: 40, 45-61]。

6 アデン港に到着したバラービル羊は、政庁（dīwān）がラスール家用によいものを選ぶまで、囲い地の中に入れられていた [Serjeant 1974: 212]。『知識の光』によれば、通常の羊が一頭あたり 1 から 5 ディーナールであったことに対して [Nūr I: 541, 548-9, 557]、バラービル羊は一頭あたり 8 ディーナールであった [Nūr II: 96]。また、ヌビアのバラービル羊も見られた [Nūr II: 96]。併せて、Vallet 2010: 403-4 を参照。

7 1 タンムは 110 ザバディー・タイッズィー（zabadī Ta‘izzī）に相当し [Nūr I: 343]、1 ザバディー・タイッズィーは約 5.5 ラトル・ミスリー（raṭl Miṣrī）に相当する [Nūr I: 340]。ヒンツによれば、1 ラトル・ミスリーは 300 グラムである [Hinz 1955: 28]。以上にしたがえば、本文中の 2000 タンムは 363 トンとなる。

8 ピアメンタによれば、アラビア語イエメン方言において sharj は、岩の割れ目や頁岩地帯（black ston area）から出て平地の田畑（fields）へ注ぐ水の流れのことを意味する [Piamenta 1990-1991 I: 250]。

9 Vallet: 418。たとえば、673/1274 年のスルタン・ムザッファルによるザイラゥ遠征計画 [Vallet 2010:419-20] や 750/1349 年のスルタン・ムジャーヒドによるダフラク島への派兵 [al-‘Aṭāyā: 405; Vallet 2010: 421] は、これらの地域がラスール朝の直轄支配下になかったことを物語る。スルタン・アフダル al-Malik al-Afḍal（r. 764/1363-778/1377）は、曾祖父であるスルタン・ムザッファルのフトバがエチオピアやアカーブ Aqāb、アイザーブ、ダ

フラク島、中国al-Ṣīn、ホルムズHurmuzで唱えられたと伝えるが [al-‘Aṭāyā: 692]、ヴァレが指摘するようにその信憑性には疑問が残る [Vallet 2010: 299-300, 419]。そうした中で、ザビードのワーリーとなったタワーシー・アミーン・アッディーンAmīn al-Dīn AḥyafがザビードにあってアデンやハラドḤaraḍ、アワーン、ザイラゥを統べたことが確認されるが [al-‘Uqūd II: 128; Vallet 2010: 423]、結局は一時的なものであったと考えられる。

10 このことは、13世紀末以降に編纂されたと見られるラスール朝行政文書集所収の地図にも表れている。イエメン全体や海岸部を描いた図の中にザイラゥなどの東アフリカの地名を見つけることができるが、行政文書中にはこれらの都市に関する説明はシフル・モガディシュ航路への言及を除いて見られない [Irtifā‘: 128]。

* 本稿は、2014年度東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）短期共同研究員として行った研究成果の一部である。既に筆者は、AA研共同利用・共同研究課題「アフリカに関する史的研究と資料」（代表：苅谷康太）2014年度第3回研究会（2015年2月26日、東京外国語大学本郷サテライト、共催：AA研基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」、日本アフリカ学会関東支部）において、本稿の内容を「ラスール朝史料における東アフリカ」の題目のもと発表している。研究を実施するにあたっては、石川博樹准教授（東京外国語大学AA研）より多大なるご助言を賜った。なお本稿は、JSPS科研費15H06464の助成を受けている。